

向ヶ岡弥生町

News Letter

VOL.16 2018年7月1日発行



育徳園(三四郎池)入口(2016年6月16日)

夏目漱石『三四郎』に描かれた向ヶ岡弥生町と三四郎池(育徳園)

はじめに

以前、向ヶ岡弥生町会 田仲町会長から、東京大学の学生が三四郎池に煙草の吸殻やごみを捨てて汚くなっているのをみかねて町会で掃除をした話を聞きました。

三四郎池は「育徳園」と呼ばれた加賀藩の庭園で最近まで整備が行われず樹林化しました。明治時代の大学建設、関東大震災の復興整備、山上会館建設、図書館建設等によって園内と周辺環境は変化しましたが、高低差のある播鉢状の地形と池という江戸時代の庭園の形を残しています。明治時代、東大病院にあった富山藩の御殿書院が東側の高台に移築されたことから「御殿山庭園」と呼ばれました。「三四郎池」は明治41(1908)年、朝日新聞で連載を開始、明治42(1909)年春陽堂から出版された夏目漱石の『三四郎』が由来で、

掲載開始から、30年以上経過した昭和21(1946)年の東京大学新聞に「三四郎池」が登場、この呼び名が定着しました。『三四郎』の中で「池」「森」と記述される育徳園は回想も含めて、二・三・四・六・七・九・一〇・一三 に登場します。二で主人公の小川三四郎と里見美禰子が育徳園で出会う前、理科大の野々宮宗八二を訪ねる場面で「弥生町」が登場します。野々宮と育徳園から本郷に向かう途中で描かれる「ベルツ像」は明治40年(1907)4月4日建設、東京帝国大学平面圖 明治39年度(1906-1907年)(図1)、明治39(1907)年の医学部卒業アルバムに写真が掲載されていることから、連載が開始前の明治39(1906)年から明治41(1908)年頃の東京大学、向ヶ岡弥生町が描かれていると考えられます。『三四郎』の向ヶ岡弥生町の記述を検討します。

夏目漱石『三四郎』二 三四郎が理科大の野々宮宗八を尋ねる場面

「午後四時ごろ、高等学校の横を通って弥生町の門からはいった。往来は埃が二寸も積もっていて、その上下駄の歯や、靴の底や、草鞋の裏がきれいにできあがっている。車の輪と自転車のあとは幾筋だかわからない。むっとするほどたまらない道だったが、構内へはいるとさすがに木の多いだけに気分がせいせいした。(理科大学の) とっつき戸をあたってみたら錠が下りている。裏へ回ってもだめであった。しまいに横へ出た。念のためと思って押してみたら、うまいぐあいにあいた。廊下の四つ角に小使が一人眠りをしていた。来意を通じると、しばらくのあいだは、正気を回復するために、上野の森をながめていたが、突然「おいでかもしれません」と言っておへは行って行った。」(株式会社 KADOKAWA2016 夏目漱石『三四郎』角川文庫 271 114 版より)

「高等学校」は現在の東京大学弥生地区にあった第一高等学校(一校)です(図2)。明治7(1874)年、東京外国語学校の英語科が独立した東京英語学校が始まりで、明治22(1889)年、一橋から向ヶ岡に移転、明治27(1894)年、一校となります。大正12(1923)年の関東大震災で被害を受け被害の大きかった目黒区駒場の東京帝国大学農学部との敷地交換が検討されます。学制改革によって昭和10(1935)年、現在の東京大学教養学部敷地に移転します。農学部の向陵碑は遺跡記念として同年2月1日に建立されました(写真2)。昭和25(1950)年第二次大戦敗戦後の学制改革により一高は「東京大学第一高等学校」と改称され「東京大学教養学部」となり一校は終焉を迎えます。

「高等学校の横」の道は言問い通りで三四郎は最初の三叉路(写真3)を右に折れ「弥生町通り」から「弥生町の門」当時の第二通用門(現在の弥生門は南へ約20メートル移動)から大学構内に入ります(写真4)。この道路は本郷通りから江戸時代の水戸藩駒込邸内を通り駒込邸跡の表門から湯島へ繋がる道と繋がります。この部分は明治10(1877)年に竣工した警視局(庁)射的場建設に伴い新たに竣工した道路で本郷から上野を繋ぐ重要な道路となりました。三叉路先の先は地図によると明治26~27(1893-1894)年までに開通しています。「弥生町通り」は「むっとするほどたまらない道」と描かれています。「弥生町通り」は谷で東京大学本郷地区、浅野地区、弥生地区に降った雨水が集まりこの立地がぬかるんだ原因と考えられます。「弥生町通り」の坂は「暗闇坂」と呼ばれています。文京区の解説によると江戸時代の坂と解説されていますが、江戸時代は水戸藩駒込邸の庭園です。名称由来は明治時代の射的場の防護壁と本郷地区側の台地に囲まれた「弥生町通り」が射的場営業当時「暗闇」だったことが名称由来と考えられます。構内に入り「理科大」で小使が「上野の森」を眺める様子が描かれます。「理科大」の建物は現在の理学部1号館にありました。理学部の研究棟建設のため工事事務所が撤去され上野の岡が見えるようになり『三四郎』に描かれた景観が復活。芝生の広場になり広場の町側に木製の柵が設置され住宅地の景観が遮られています(写真5)。

三四郎は理科大学を出た後育徳園に向かいます。現在の育徳園に入り園路を左に曲ります。



写真1 ベルツ像 昭和36(1961)年11月3日 医学部図書館東側から北へ約60メートル移動



写真2 向陵碑(東京大学弥生地区)



写真3 言問い通りと弥生町通りの三叉路



写真4 弥生町通り(暗闇坂)と弥生門



写真5 上野の景観 本郷地区工学部1号館東側の芝生広場



図1 夏目漱石『三四郎』二に描かれた三四郎(東京帝国大学平面図 明治39年度(1906-1907年))

石橋を渡ってすぐの池畔に腰かけ、坂を降りてきた美禰子に出会います。美禰子が去った後、実験を終えた野々宮と再会し、富山藩書院だった「会議所」のある高台に登り、野々宮の景観分析に感心し「ベルツ像」前を通り本郷へ向かいます。三以降、育徳園を中心に三四郎の大学生活が描かれます。運動会の場面では江戸時代の傘御亭跡からの景観をうかがうことができる描写があり

ます。物語は、丹青会で原口が育徳園の美禰子を描いた「森の女」お披露目で終わります。
育徳園整備のあり方WGと育徳園の整備
ゴミ箱設置、喫煙の規制によって町会長がおっしゃっていた当時のようなことはなくなりました。昔の三四郎池を知っている方は、以前より薄暗く水位が下がった。蚊が多くて行く気がしない。

学生、教職員の中には一度も行ったことがないという方も。昭和 61 (1986) 年の山上会館竣工に伴い整備されましたが、それ以降管理は行われず、樹木の折れ、倒木といった安全上の問題が発生した度に剪定などの対応をしてきました。整備計画はなく樹林化し入口以外の園路は薄暗く、建設工事による地下掘削で水位が低下、2013 年の大雪で倒木が相次ぎました。東京大学は育徳園の整備を行うにあたり、2015 年度に育徳園整備のあり方WGを結成（主査 横張真（工学系研究科教授））。私はメンバーに加えられました。管理の問題点、育徳園の歴史を生かした整備等が議論されました。2016 年、WGの報告書が公開され今後の整備方針が示されました。2016 年度、危険木、シュロ、外来種のトウネズミモチが伐採され、入口付近を中心に環境が改善されました。先は長いですが学内だけでなく周辺住民の憩いの場になるよう調査研究を進めています。

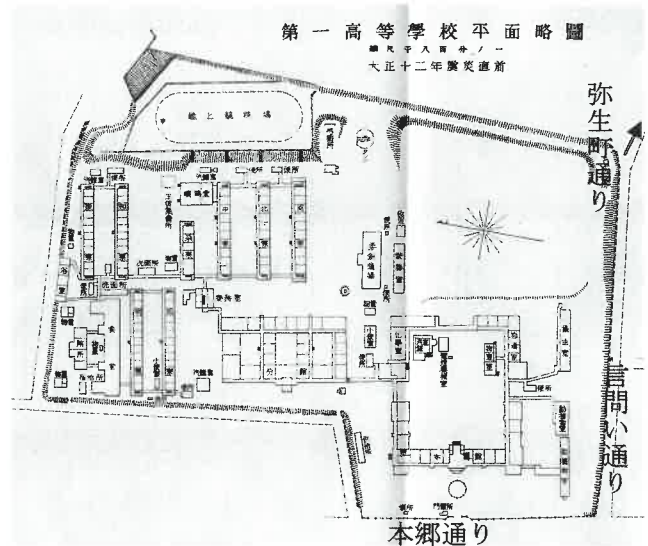


図 2 第一高等学校平面略図 大正 12(1923)年
第一高等学校 1939『第一高等学校六十年史』より



写真 6 吳建の描いた育徳園



写真 7 西田富三郎 1959「御殿山庭園の池」
『東京の庭』株式会社紀伊国屋書店より



写真 8 現在の育徳園

吳建の描いた育徳園

医学部図書館1階に3枚の絵が展示されています。南西の池尻から安田講堂を描いた作品に「吳建先生画」とあります（写真6）。吳建（明治16（1883）・昭和15（1940）年）は東京大学医学部教授で内科学第二講座を担当。専門は心臓神経学。帝展に4回、文展に2回入選。階段の「池の端」は昭和9（1934）年、外来患者診療所に展示されました（『東大病院だより』（NO.542006.8.31））。写真6に橋は描かれていませんが、二本のハウノキのうち手前の一本が残っています。「日本精神医学の草分け」と呼ばれ、夏目漱石の主治医だった吳秀三は叔父で、秀三は現在の東京大学弥生地区内にあった東京府癲狂院が移転した巣鴨病院の院長を務めました。秀三の父、吳黄石は江戸時代広島藩医を務めました。

編集後記

VOL.15 発行の発行は 2017 年 5 月 23 日でした。しばらくお待ちしました。向ヶ岡弥生町町会ニュースに書いたものを詳しく書きました。参考文献はこちらです。
原祐一 2018「育徳園の現状と課題 5 夏目漱石『三四郎』に描かれた育徳園」平成 30 年度日本庭園学会全国大会シンポジウム・研究発表要旨集 pp.21-28

向ヶ岡弥生町

News Letter

VOL.16 2018 年 8 月 13 日発行

発行 原 祐一

連絡先 〒153-8904

東京都目黒区駒場 4-6-1 東京大学埋蔵文化財調査室

携帯 080-5504-9782 メール y-hara@dolphin.ocn.ne.jp

印刷 株式会社 芳文社

〒194-0037

東京都町田市木曽西 2-3-14

電話 042-792-3100